

## 食糧難に思う

鞍手郡鞍手町 村田 きよか

第二次世界大戦は山間の小さな農村にまでも食糧難を及ぼしたのです。それは農業をする男性のほとんどが戦争へと召集されてしまい、残されたのは老人や女子供でした。みんな力を合わせて働いたが収穫は思うように採れず、供出米は面積によって割り当てられ、収穫がなくても納めなくてはなりませんでした。お米を作っても食料は足りません。毎日代用食、芋やかぼちゃなどはお米の代わりに食べました。野菜をたくさん入れた雑炊、お米は僅かしか入っていません。山百合の球根やかんねかずらの根っこででんぷんをとりました。さつまいもを粉にしたり芋飴にしたこかす餅も焼いて食べました。むぞむぞしてとても食べ辛かった。しかし、食べなくてはお腹が空いているから食べました。

糖分は全くなかったから、柿でジャムを作った。糖分はミツゲンと言ってワカモトくらいの粒錠が小さな箱に入って売っていました。それは石炭から取ったように聞きました。それが最高の糖分であり全ての料理に使いました。塩を買うにはお米と物々交換でないと手に入りません。それは海辺の人達もお米がなかったからです。汽車で2、3時間乗り継いで農家に塩と米を交換してもらいに来るのです。もう全国民が食糧難に苦しんでいたのです。酒の代わりにメチールを飲んで中毒死亡したり失明したりしました。お酒の好きな方はやむを得ず飲んだのです。本当に気の毒でした。栄養不良のために色々な病気が起こりました。医者もいません。病院には薬局兼看護婦として医師の奥さんが治療をしていました。応急手当程度でした。薬もありませんでした。

もう全てのものがなくなっていきつつあったのでしょう。仏間の道具は、昔は金や銅・錫の製品が使われていたので全部献納させられました。鍋や土瓶（急須などの高級品）も献納しました。お金は全て紙幣になっていました。こんな貧しい農家を頼って疎開して来る人や引揚げてくる人で、食糧難は一層苦しくなったのです。みんな山や荒地を開墾して食料を作りました。道沿いにもみんな植えていました。大きな大木はキョウボクとして伐られていきました。松の油も採って村中で集めて軍隊へ送りました。松の油は大木の根元に錐で穴を開け、竹の細かいのはめてその管の先にカンやピンを置いて、それに一滴ずつ落ちたのを集めたのです。あまり多くは採れませんでした。

着る物も履き物も不足していて藁草履を作って履いたり、下駄も家で作っていました。婦人会で藁でマットも作りました。何でも手作りでした。こんな苦しい生活の中でひとつ心に残っているのは、村中の人々が助け合って生きていたことです。